

海外で心に残った記憶と背景

(アゼルバイジャン編)

2023年10月記 松村 眞

はじめに

外国を訪問すると、予期しない体験をして驚いたり感心したりすることがある。見聞きして面白く思うこともあれば、違和感を覚えることもある。日本を訪れた外国人と接しても同様で、その時の記憶は時間が経っても容易に忘れない。意図的な結果ではないから他人に伝える機会は少ないが、印象が強いので参考になることも多い。本稿では中央アジアのアゼルバイジャンで経験し見聞きした驚きや違和感について、事例の状況と考えられる背景を紹介する。

アゼルバイジャン・バクーの環境管理計画作成（2000年11月）

2000年の初めだったが、突然、国際航業という会社から電話があった。この会社は測量して地図を作るのが本業だが、土地測量の技術を環境調査に拡大し、さらに環境保全のコンサルティングも手掛けていた。電話の趣旨は、国際協力事業団（JICA）が入札するアゼルバイジャン・バクーの環境管理計画立案に応札しようとしており、協力する意向があるなら経歴書を送って欲しいというものだった。私に打診があったのは1990年代の後半に東欧の環境調査を担当していたからである。その時の顧客だった海外コンサルティング企業協会の担当者が、国際航業の担当者と知り合いで私を紹介したのである。私は中央アジアには行ったことがなく、アゼルバイジャンの場所もわからなかったが面白そうに思えたので急いで経歴書を送った。

すると直ちに連絡があり、国際協力事業団（JICA）に提出する提案書の作成に助言を求められた。コンサルティングとしてはかなり大型の案件で、約1年で現地の環境や産業を調査し、次の1年で環境管理計画を立案することになっていた。その中で、もし受注できれば私に現地の工場調査を担当して欲しいとのことだった。主な汚染源は火力発電所と製油所だったから、石油精製に詳しい人材を求めていたのである。そこで私は想定される大気汚染物質と対策技術を提案書に記載する文章にして送った。その後しばらくして国際航業から案件を受注した連絡があり、プロジェクトのメンバーとして参画する契約をした。

国際協力事業団（JICA）の海外コンサルティング案件は、通常は納期が1年から2年で受託金額は数億円の場合が多い。役務範囲が広く多様なので、応札しようとする企業は社内スタッフだけでは対応できず、私のような外部スタッフの参加を前提にプロジェクトチ

ームを編成する。外部スタッフは、多くの場合に経験が必要な特定の分野を担当する。専門知識が必要なので受注が確定してからではなく、応札段階から協力を求められることが多い。私に求められた役割は 3 種類だった。一つは首都バクー市に立地する工場から排出される環境負荷物質を調査し、網羅的なデータベースを作ることだった。工場数は全部で約 250 とされ、期間は 2000 年の 3 月初めから 5 月末までの 3 ヶ月が予定されていた。二つ目は日本に戻って 8 月末までに実態調査の報告書を作成し、環境管理計画の原案を作成することだった。三つ目は 9 月初めに再びバクーに行って市の環境関連部門と討議し、9 月末までに環境管理計画をまとめることだった。



アゼルバイジャンとバクー

ここで簡単にアゼルバイジャンの首都バクーの概要を紹介しよう。アゼルバイジャンは、カスピ海の西側にある北海道と同じぐらいの広さの国で、北はロシア、西はジョージアとアルメニア、南はイランに接している。人口はアゼルバイジャン全体が約 800 万人、首都バクーは約 200 万人である。バクーはカスピ海中央部の西側から突き出たアプシェロン半島の南部にあり、古くは海上交通の要所として発展した街である。今も城壁に囲まれた旧市街



バクーの市街地

地と宮殿の跡に、豊かだった当時の面影がみられる。しかし百数十年前に石油が発見されてから、ロシアを中心とする旧ソ連邦に石油と化学製品を供給する役割を担うようになった。旧ソ連の戦争にバクーから参加した兵士も多く、西側にある高台が戦争記念公園になっている。ここからはじめて市街地の全景を見たときは、右半分が青く光るカスピ海で、左半分は白っぽい建物ばかりという印象だった。緑が少ないのは、雨量が年間 300 ミリ程度の乾燥地域だからである。

バクーの気温は日本と同じぐらいだが湿度が低い。春先は風が吹いている日が多いので、体感温度では日本より少し寒く感じる。バクーには「風の街」という意味があるそうだ。バクーの西部と南部には茶褐色の平原が広がり、木々が少なく見た目は砂漠に近い。一方、北部や山間部には緑地が多く、鳥の音がさえずり、放牧されている牛馬をよく見かけた。人種は大半がトルコ系で、日本人の居住者は 30 人に満たなかった。だから現地の人はほとんど日本人を見たことがなく、われわれも中国系と見られていた。

日常語はアゼルバイジャン語で公用語はロシア語である。バクーの街中では英語が全く通じない。これまで多くの国を訪れたが、サンキューもグッドモーニングも通じないのには驚いた。だから一人で郊外のレストランに入ったときは困った。でも何回かやってみて、ゼスチュアで注文を伝えられるようになった。頭の上に両手をあげて、指を横に出せば牛、指を丸めれば羊、手を伸ばしたまま頭を下げて腰をくねらせれば魚、手を後ろに回してたたけば鶏という具合である。豚肉はイスラム教だから普通は食べないし、レストランのメニューにもない。郊外のレストランにはメニューがないことが多く、あっても 1 枚のカードに手書きで書かれた数行のメモである。しかし中心部に行けばイギリス人やドイツ人もいるので、大きなレストランには英語のメニューも用意されていた。

市街地から少し離れて郊外にでると、いたるところに敷設されているパイプラインとおびただしい数の石油採掘やぐらに驚く。パイプラインといっても石油やガスだけではなく、上水も下水も見た目は同じ鋼管のパイプラインである。日本にも同じような導管が敷設されているのだが、バクーの郊外では地上にゴロンと置いてあるから目立つのだ。複数のパイプラインが錯綜している場所があったので手でさわってみたら、チョロチョロと水の走る音がすると、なんの音も振動もないのがあった。今では使われていないパイプラインもあるのだろう。

バクーの石油

石油採掘やぐらは調査の結果で約 2 万基ということがわかった。場所によってやぐらの集中状況に差があり、60 メートルから 70 メートルぐらいの間隔で見渡す限り林立している場所もあった。こうしたやぐらの集中地区を遠くから眺めると、まるで森か林のように

見える。アプシェロン半島の南側からカスピ海に接する一部がそうした集中地区の一つだが、石油採掘のために浅瀬が埋め立てられていて、区画した水路のいたるところに真っ黒いタールがたまっていた。これらの石油採掘井戸は、初期には数十メートルの深さだったそうだが、現在は1500メートルもの深さに達している



カスピ海に面した石油井戸集中区域

るものもある。60メートル程度の間隔で1500メートルも掘ったら、先の方で採掘パイプがぶつかりそうに思うのだが、採掘を管理している会社の話では、互いにぶつからないようにコントロールできるそうである。

多少石油採掘の歴史を聞いたら面白いことがわかった。今でもそうだが、バクーには地上に石油が自然に染み出している池がたくさんある。初期にはこうした池を少し掘っただけで石油が大量に噴出することがあり、燃料として売った人が金持ちになったそう。当時は機械動力がなかったため、もっぱら人が全身油まみれになりながらバケツで石油を汲み出したとのこと。このため石油の単位は今のバレル（樽）ではなく、バケツだったそうである。



石油が自然に染み出している池

動力が使われるようになると採掘用のやぐらが必要になったが、鉄材が乏しかったので初期のやぐらは木製だった。当時は防火対策も技術も未発達だったので、木製のやぐらが火災で炎上している古い写真があった。当時の石油の輸送は馬車が中心で、10個ぐらいの木製の樽（バレル）を横に積んで運んでいる写真もあった。現在、石油を生産している一番古い井戸は1890年代のもので、もう100年以上も石油を産出し続けている。その一方

で、2万基の少なくとも三分の一は枯渇に近く、生産を停止しているか生産していても産出量が1日に1トンぐらいしかない。

バクーの郊外

バクーの市街地を抜けて南部に車を走らせると、すぐに茶色の荒野が広がっており、その荒野を石油とガスと水を輸送するパイプラインがどこまでも続いている。パイプラインと並行して鉄道線路が走っているところも少なくない。ところどころ緑の多いところがあり、20~30頭ぐらいの羊の群れが草を食んでいる。羊のそばには長い木の棒をもった羊飼いがいて、強い風で飛んでくる砂塵から身を守るために、頭部に顔までかくせる大きな布を巻いている。まるで旧約聖書に出てくる風景のようだ。

バクーの南部でも石油が採掘されているので、ところどころに簡単な精製装置と出荷設備がある。カスピ海の浅瀬にはガス井戸もあり、年間500万トンもの天然ガスを産出している。この天然ガスからガソリンとLPGを回収する大きな精製工場もある。バクーをカスピ海に沿って北上すると、左側にバクー市に水道を供給する貯水池があり、そこを過ぎるとスムガイというコンビナート地区に入る。スムガイは川崎と四日市を



スムガイで稼働中の化学プラント

合わせたぐらいの広大な工業地区で、あらゆる化学製品の生産基地だった。しかし旧ソ連邦が崩壊した後は需要が低下して、2000年の時点で設備の稼働率は10%~20%程度だった。スムガイのコンビナートは土地が広く、関連する装置の距離がひどく長い。このため、10キロメートルを超えるパイプラック（配管を乗せる鉄骨の架台）が四方八方に伸びていた。日本のコンビナートを見慣れた目には、装置と装置の距離がこれほど長い理由が理解できない。経済性よりも、戦時における集中立地のリスクを避けようとしたのではないだろうか。このパイプラックも装置も赤く錆びていて、保温材のガラス繊維が剥き出しになって垂れ下がっており、まるでコンビナートの墓場のように見えた。これらの装置群は、規模は大きくても経済性の点で国際競争力がないであろう。

スムガイを過ぎると、今度は5キロメートルぐらい続く巨大な操車場が現われる。無蓋

貨車、続いて鉱石専用車、さらに液体輸送のローリー車が、何百両どころか何千両もレールの上で眠っていた。貨車の墓場を過ぎると今度は機関車で、これも少なくとも数百両が錆びた車体を風雨にさらしていた。広い操車場地区を過ぎると牧草地が広がるようになり、羊だけでなく牛や馬も草を食んでいた。気のせいかわるの少ない南部より、草木の多い北部の方が人間も家畜も幸せそうに見える。さらに北上すると木々が多くなり、道路も並木道が増えて、名も知らぬ広葉樹や札幌で見られる背の高いポプラ並木も現われた。ロシアとの国境近くまでくると木々はさらに増え、水源地は鳥のさえずる美しい森の中だった。

バクーの食事・交通・住宅

バクーの食事はケバブと称する羊か鳥の串焼肉が一般的で、大きいレストランには牛肉もあった。豚肉はイスラム教の影響でほとんど食べない。小さなレストランでケバブを注文すると、裏にある肉塊から切り分けて串に刺し炭火で焼いて持ってくる。注文を受けてから切ったり焼いたりするので、いつも20分ぐらい待たされた。でも現地の人は誰も急かしたりせず、ゆっくりとおしゃべりしながら待っていた。街には肉塊を吊るして売っている店が多く、場所によって50メートルぐらいの間隔で並んでいた。店といっても肉屋というより大きめの屋台といった方がよいと思う。売られている肉のほとんどは羊で、売り場の横手には補給用に数頭の羊が繋がれていた。だから冷蔵庫がなくても食材はかなり新鮮といえるだろう。

魚はチョウザメとボラのような魚が売られていたが、日本に比べると種類が非常に少ない。チョウザメは街で買うこともできるし、レストランでステーキを食べることもできる。私が滞在したアパートに近い店では、チョウザメを目の前で輪切りにして売っていた。一度買って帰りバター焼きにしたら美味しかった。歯ごたえは魚より肉の感触だった。レストランの食事は高く10ドル程度、少し贅沢にしても20ドルぐらいだったから、値段をあまり気にする必要はなかった。

交通は地下鉄とバスとタクシーがあった。地下鉄はきれいとはいえないし、ルートが限られているから現地に詳しい近場の人しか利用できない。バスは日本のような大型車ではなく定員が20人程度のマイクロバスで、どこでも見かけるほど台数が多い。走行ルートと行先は前面に掲げている番号でわかるようになっていた。しかし街や通りの名前に馴染みがなく、アゼル語が読めない外国人は乗りこなせない。このため外国人にはタクシーだけが頼りだが、メーターがなく外国人と見ると必ず吹っかけてくる。だから最初に行きたい場所を地図で示し、次に現金を見せてそれで行くのか確認してから乗り込んだ。それでも故意に遠回りして、降りるときに「もっとよこせ」という場合もあった。そんなときは厳しく「No」と言えばよいのだが不愉快だし面倒である。だから夜でなければ、歩けるところは歩いていた。

一度、仕事の仲間 3 人がタクシーで「おいはぎ」にあつて所持金の大部分を奪われた。かなり酒に酔ったままタクシーで街の中心部に行ったのだが、途中で 3 人の制服警官に検問され、その警官がおいはぎに変身したのである。あとから現地の事情に詳しいイギリス人に聞いたら、これが典型的な「おいはぎ」で酔った外国人がターゲットになるらしい。悪質なタクシードライバーは酔った外国人を乗せると仲間に合図して検問させ、取った金を後で山分けするらしい。でも危害を加えることはないとのことだった。なお、警官になるのは簡単だが、給料が安いのでこんなアルバイトで生活費を稼ぐ不心得者が少なくないようである。そのためか検問が非常に多く、車の持ち主は検問されたらいくら払うしかない。払わないとなんくせをつけられるからである。私が現地の人と車に乗っていたときも検問され、かなり抵抗していたが結局は払わされていた。困ったものである。

バクーに滞在中は週に何回かスーパーマーケットに食料品を買いに行った。でも日本と違って、すぐに食べられる総菜や半調理品がない。それに 1 パックの量が多いので、単身者の自炊には不便だった。たとえば牛肉や羊肉は 1 キロ以上のパックになっているし、鳥は 1 羽単位が普通だった。私はなるべく小さな単位で買うようにし、鶏は小さな枝肉を近所の小さな店で買うようにしていた。卵もスーパーではなく近所の店で買っていたが、6 個から 10 個のパック売りだけでなく、1 個ずつのバラ売りも一般的だった。野菜と果物は近所の市場に買いに行った。リンゴやオレンジは少しでも美しく見えるように表面を磨き、高く積み上げて売っていた。野菜はキュウリ、ナス、トマト、ホウレンソウが売られていたが大根と白菜がなかった。

買物で不便なのはやはり言葉で、アゼル語で書いてある説明が全くわからないし、英語の質問は通じないので缶詰はラベルの絵だけが頼りだった。肉はどの部分かわからないので、買って見たらひどく硬くて調理に困ったことがある。スパゲティを食べようとミートソースを買ったのに、缶を空けたら麺も一緒に出てきて驚いた。お米はいろいろな種類があるので、形が日本の米に近いのを選んで買っていた。電気釜がないのでアルミの鍋で炊いていたが焦げやすくて困った。大きなスーパーには食品と日用品が一通りはあるのだが、日本の調味料、特に醤油がないので困った。一度醤油と確かめて買ったのだが、ドイツ製で酢が強く使えなかった。キャビアはいつでもどこでも売っていたが、品質と値段に大きなばらつきがあり見極めが難しかった。市の中心部にマクドナルドがあつて、値段はかなり高いのにすごい人気だった。同行している仲間以外に日本人は見ないし、日本製品もほとんどなかった。車は古いロシア製と韓国製が中心だった。

バクーの人達の住宅は基本的に集合住宅である。一番多いのは5階建てで、次は9階建て、次は12階建てが多い。部屋の広さは50平方メートル程度の2DKが中心である。5階建てまでエレベーターがないのは、日本の集合住宅と同じである。ベランダの構造も日本と同じだが、居住者がベランダの上部をガラス窓にし、勝手に居住面積を増やしている家が多い。このような改造は中国でもよく見られる風景である。日本と同じように洗濯物はベランダに干すが、それでも足りなくて隣の家のベランダまでロープを伸ばしている。隣の家だけではなく電柱や街路樹が近い家は、そこまで10メートル以上も輪になったロープを伸ばしていた。ロープの両端には滑車をつけてあり、洗濯物を干すときや取りこむときはカラカラと音を立ててロープを引っ張るのである。郊外は市街地より土地が広いので、新しい戸建てが増えてきているが、それでも集合住宅の方が圧倒的に多い。



バクー郊外の集合住宅と市街地の筆者（右）

生活に関する環境問題で気になったのは、いたるところに散らかっているポリ袋である。ごみは郊外に埋立て処分場があるのだが、収集が不完全なので近場に勝手に捨てる人が少なくない。だからごみと一緒に捨てられたポリ袋が、強い風で周囲数キロに吹き飛ばされ、木々の枝や灌木の茂みにひっかかって景観を台無しにしていた。木の枝にひっかかっている姿は、まるで枯れ木に大きな花が咲いている感じで、草原は不自然なお花畑のように見える。それなのに小さな商店までポリ袋を多用しており、特にスーパーマーケットは日本よりも安易にポリ袋を使用していた。環境問題としては自動車の排ガスを予想していたが、東南アジアの都市部に比べたら全く問題



バクーの子供たち

にならない水準だった。交通で気になったことだが、自転車が使われていなかった。ほとんど 1 台も走っていないのである。子供の遊び用も含めて、自転車がこれほど一般化していない国を見たのは初めてだった。バイクも同様に 3 ヶ月間にほんの数台しか見なかった。なぜだろう。バクーの子供たちは全般的に色白で、屈託のない笑顔がとても可愛いが、服装のサイズが大きすぎる子が多かった。たぶん上の兄弟姉妹の「お下がり」だろう。

バクーの環境負荷物質排出調査

バクーの工場調査では、現地関係者とのコミュニケーションと資料の入手にかなりてこずった。市の環境行政部門には工場のリストがなかったので、税務署を訪問してやっと手に入れた。この時点でバクーには約 320 の工場があることがわかったが、このうちの 240 が国営だった。石油、ガス、電力はもちろん、大規模な製造業やサービス業はほとんどが国営だった。これは私が訪問してわかったことだが、大規模工場は敷地が非常に広く、数ヘクタールから 20ヘクタールもあった。敷地の中には従業員の住宅もあり、子供たちが工場設備のそばで遊んでいた。大工場のいくつかには外資が導入されて民営化されており、清涼飲料、タイヤ、繊維製品、タバコなどが外資系になっていた。320 工場のうち、最終消費財を生産する 70 工場は生産を停止して民営化を待っていた。

私は稼動していた 250 工場から排出される環境負荷物質を、大気質では硫黄酸化物・窒素酸化物・ばい塵、水質では有機物と懸濁物質の濃度を調査することにした。そこで調査票を英語で作成し、ロシア語に翻訳してもらった。先進国なら調査票を郵送して記載を求めるのだが、工場側にそれなりの手間と時間がかかる。それに強制力がないので高い回収率を期待できないから、やむなく訪問して調査することにした。このため現地で 16 名の調査員を雇い、2 名ずつ 8 組のグループを作った。私自身も石油生産、石油精製、ガス精製、機械、繊維、建材など主要な 20 工場を訪問した。その結果、産業公害は予想よりかなり低い水準にあることがわかった。

まず大気汚染だが、バクーの原油にはほとんど硫黄分が含まれていない。天然ガスにも含まれていない。重油の硫黄分は 0.2% から 0.5% だが、原因はカスピ海対岸のカザフスタンやトルクメニスタンの硫黄分を含む原油も処理しているからである。それでもこの程度だから、硫黄酸化物に悩まされた日本や、現在も深刻な中国と比べればはるかに恵まれている。石炭はほとんど使っていない。浮遊粒子状物質（煤塵）については、セメント工場など粉体を扱っている工場に電気集塵機かバグフィルターが必要である。訪問調査の結果、この時点で約半数の工場が設置していた。したがって、現在はほとんど設置が完了しているだろう。

産業廃水については工場が有害物質と固形分を除去し、下水処理場が最終処理をする役割分担ができていた。下水処理場の処理基準は日本以上に厳しかったが、量的な処理能力が不足していた。廃水処理で発生する汚泥は、広いポンドを順番に使用して天日乾燥し、その後は土壌に還元していた。日本では焼却処理が多いが、ここでは土地が広いのと雨が少なく湿度が低いのでこの方法で問題ないであろう。産業廃棄物は有害物質と無害物質に分けて、それぞれ埋立て処分されていた。非鉄金属や化学系の有害物質が少ないので問題はないが、それだけ付加価値の高い製造業が少ないのである。

工場に行くと、外資系はどこもきれいだが簡単には内部を見せてくれなかった。アポなしで行ったら、文書で事前にアポを取ってこなければ何も話せないと言われたこともある。こう書くと冷淡なようだが、欧米や日本ではごく一般的な対応であろう。一方、国営工場は飛び込み訪問でも非常にていねいで親切に接してくれた。何人も出てきてどんな質問にも答えてくれるのはありがたかったが、国営工場なので企業秘密という概念が乏しいのだと思った。工場訪問は昼食時間を避けるようにしたが、あまり気にする必要はなかったみたいである。というのも昼休みの時間が決まっていないようで、各人が自席で勝手に食べていた。日本のような社員食堂は見かけなかった。国営工場の設備は旧式が多く、労働環境は暗く汚い場合が多かった。日本企業との合弁を希望する工場も多かったが、カタログなど生産能力を説明する資料がなく、願望だけが先行している感じだった。

工場訪問でバクーの産業は基本的に石油とガス、それに電力などエネルギー産業が中心ということがわかった。機械産業はあるが石油産業向けの掘削ドリルやポンプなどの重機械が多く精密機械はなかった。石油生産、石油精製、ガス精製、電力、セメントなどの工場は、ソ連が邦崩した後の稼働率が低く、煙のでている煙突が少なかった。郊外の化学工場は工場の墓場のようで、錆びた装置、取り外した配管、壊れかけた架台などが目立った。



バクー市内の製油所

主な産業公害は、約 2 万基もある石油採掘やぐら周辺の土壌汚染、カスピ海の油泥汚染、それにソーダ工場からの水銀汚泥だった。製油所は 2 ヶ所が操業しており、他の産業より稼働率が高いものの 1 ヶ所が 55%、もう 1 ヶ所

は 25%しかなかった。フレアスタックからは大きな炎が出ており、市街地の中心部からもよく見えた。機械産業は生産を停止している国営工場が多く、広大な敷地に人影がまばらだった。全般的に工場の稼働率が低いので、環境は日本で想像したより悪くなかった。環境モニタリングデータは、場所によって信頼性に疑問があった。大気環境の観測点に行ってみたのだが、薬品がなくて一部の計測機器が使われていなかった。それでも観測員はノートにすべてのデータを記載していたから、一部は捏造していたのではないかと思う。

バクーの生活と社会環境

バクー市が提供してくれたオフィスは郊外にあって、毎朝、定時にマイクロバスで出勤し、定時に滞在しているマンションに戻った。紛失が怖いのでパソコンも書類も全部持ち帰った。昼食時には執務室に鍵をかけて、皆が同時に食べに出て同時に戻るようにした。2日に1度ぐらい停電があった。停電になると暖房も切れるので、3月は暗いオフィスでコートやジャンパーを着たまま仕事を続けた。このオフィスビルでは別の部屋で現地の役人も仕事をしているのだが、朝からタバコを吸いながら数時間も立ち話をしており、午後はレストランや商店にアルバイトに行く人が多かった。みたところ、彼らの机には電話も書類もなかった。要するに働いていないのである。

役人のアルバイトが公認されているのは給料が安いせいもあるが、社会主義国の伝統で過剰雇用が一般化しており、仕事がないことも影響している。なお、ここにきてわかったのだが、役所や企業はどんなに仕事がなくてもめったに従業員を解雇しない。このため表面的な失業率は非常に低いが実態は失業状態で、給料は払われないか、払われても正規の給与の1割とか2割のように非常に少ない。だから彼らは外に収入の道を探さざるを得ないのである。この方法を日本でいうと、リストラ解雇はしないが給料は払わないということになる。給料を払わなくてよいなら、誰もリストラ解雇をしないであろう。それに解雇すると、社宅が基本の彼らの住宅も明け渡しが必要になるのである。

バクー滞在の感想

3ヶ月滞在して、この国には環境以前にいろいろな問題があることがわかった。大きな問題は社会主義体制の後遺症である。完全な中央集権、責任を問われない官僚主義、働いても働かなくても処遇に差がない結果平等が、どのような結果をもたらすのか歴史の検証を目の当たりに見ている気がした。土地や住宅も個人所有が認められなかったので保守が貧弱になり、オフィスビルもアパートも外観が汚れて破損したままだった。道路はいたるところに穴ができていたので、人は歩きにくいし車は穴をよけながらくねくねと走っていた。でも道路は広くて公園が多く、都市計画は日本よりよくできていた。

街の中心は噴水広場と呼ばれ人々の憩いの場になっていた。大きなマックの店が、値段は安くはないのに人気を集めていた。バクー中心部のアパートは多少汚れていたが、よく見ると彫刻のある西欧風の建築が多かった。旧市庁舎やオペラハウスは芸術的な価値も高いであろう。したがって公私の責任区分が明確になり、不動産の個人所有が広がれば、もっときれいな



バクー市街地の中心、噴水広場

街になるであろう。企業も民営化されて生産意欲が刺激されれば、権威主義や無責任な官僚機構が改善され、比較的短期間に経済を再生できる可能性があると思った。これまでに接触したアゼルの人たちの何割かは、それだけの知性と教養があり、教育水準も高く大いに期待できると思った。バクーではすばらしいオペラをみた。外観が汚れていてこれがオペラ劇場かと疑ったのだが、内部はきれいで舞台装置も見事なものだった。歌手は声がよく通って迫力があり、オーケストラもよく調和していたので、心が洗われる気がした。率直に言うとうちの汚さや、なんにでもコミッションを要求する怠惰な役人に失望していた。外国人と見れば少しでも多く金を取ろうとする商売人たちにも落胆していたが、このオペラを演じている人たちを見て気を取り直した。入場料が 10 ドル程度だったことを考えると、出演者のギャラは決して高くないであろう。住宅だって設備の悪い狭いアパートに違いない。それでも一生懸命に自分の芸を磨き、人々に感動を与える努力を惜しまない人たちもいるのである。決して金銭だけが人を動かすものではないと思ひ直した。

私が滞在していたのは、郊外の外国人長期滞在用マンションである。この部屋の窓からは、右手に遠く離れた集合住宅や発電所の煙突が見えた。バクーは水が乏しいので木々が少ないが、それでもまばらに杉の並木が見えていた。窓のすぐそばには構内の松が伸びていて、大きな松ぼっくりに手が届きそうだった。空は青く澄んでいる日が多く、とてもきれいで大気汚染は感じなかった。風の強い日が多く、そんな日は窓のそばの松も大きく揺れていた。私は持参したパソコンで日本にいるときと全く同じようにメールのやりとりをしていたが、いつでもどこにいても自由にコミュニケーションができる便利さに嬉しくなった。バクーの工場から排出される大気と水質の環境負荷物質は、私の網羅的な調査で初めて定量的に明らかになった。知らない国の知らない工場を訪問するのは、面白くて得るものが多かった。なお、日本で自炊したことがないのに、60 才を過ぎてから馴染みのない国で自炊生活する羽目になったが、なんとかなるものだと思ひがついた。でも味噌と醤油

が手に入らないことと、刺身や海苔がないことが少し辛かった。現地の滞在は3ヶ月と1ヶ月の2回で、国内作業を含めて約6ヶ月の仕事だった。報酬は私の経歴がそれなりに評価され全部で500万円ぐらいだったと思う。

アゼルバイジャンの社会的な背景

- ① アゼルバイジャンは、1918年にアゼルバイジャン民主共和国としてイスラム教徒を中心とする国になっていた。東ヨーロッパと西アジアの交差点に位置しているため、当時から交通の要所として栄えており、首都バクーには当時の古い宮殿が残されている。
- ② 1920年にはソビエト連邦に編入されアゼルバイジャン・ソビエト社会主義共和国になったが、ソ連が崩壊した1991年にアゼルバイジャン共和国として独立した。
- ③ アゼルバイジャンは6つの独立したトルコ系国家の一つである。182カ国と外交関係があり、国連（1992年以降）、欧州評議会、NATO 平和のためのパートナーシップ（PfP）プログラムなど38の国際機関に加盟している
- ④ 大統領の権限が強いが、ソビエト連邦に編入されていた期間が長いので、行政機構に社会主義の官僚体制が大きく残っている。このため、建て前と本音が混在しており、公的な報告が実態と乖離していることが珍しくない。産業はサービス業がかなり民営化されているが大企業はまだ国営が多い。
- ⑤ 大企業はモスクワの中央官僚向けに「環境パスポート」と称する報告書の提出求められていたので、内容を確認したら企業内組織や分野別の詳細な業務報告まで含まれていた。資本主義体制なら企業秘密に該当する内容である。一方、今の現地政府が「環境パスポート」を重視しているかどうか疑わしい。提示を求めたら倉庫の奥を探して見つけ出してきたが、数値は現地調査と乖離していることが多かった。
- ⑥ 教育水準は高く英語教育にも熱心である。中学生の方が大人より英語を話せる。英語を話せる若い人も多く、街を歩いていたら通訳として雇って欲しいと持ちかけられた。
- ⑦ 建築物は石材を積み上げる方式が多く、壁の厚さが30センチぐらいあった。窓は壁の一部を切り抜いて作っていた。石材が非常に豊富で安価なのと、地震がないから鉄骨の強度が必要ないのであろう。
- ⑧ トラベラーチェックもクレジットカードも使えないので、数か月分の滞在費をドル紙幣で用意し、借りていたアパートのスーツケースに保管していた。留守中の盗難が心配だったが、アパートの入り口には守衛所があり複数のガードマンが24時間体制で警備していた。室内の清掃担当者は、勤務年数が長く信頼性の高い女性を雇っているので心配ないと言われた。このアパートにはボイラー室があり、自家発電設備と給湯設備が備えられていた。設備は常駐の係官が運転していたので停電の心配はなかった。一方、外国人専用ということで、賃貸料が1日約50ドルと高額だった。

海外で心に残った記憶と背景（アゼルバイジャン編）終わり